

則松久夫理事作成 参考メモ 東京ローズ考  
東京ローズの悲劇 (2018. 10.6 諜報研究会・文化学院跡見学)

連合軍最高司令官ダグラス・マッカーサー元帥が厚木飛行場に降り立ったのは昭和二十年八月三十日の午後二時五分であるが、その日の早朝、戦略空軍付従軍記者たちが沖縄から B 一七で既に厚木に着いていた。

彼等は焦土化した東京の荒廃を伝え、東條英機と東京ローズの面会記事を取ることを大きな課題としていた。「東京ローズ」とは太平洋諸島の GI が名付けた対米謀略宣伝放送(ラジオ東京)の女性アナウンサーのニックネームである。大勢の外国記者達の取材競争は熾烈を極め、将校服の彼等が放送会館になだれ込むと局内は恐慌を来した。

八月三十一日、早くも二人の辣腕記者が、海外局の女性アナウンサーの一人、アイバ・戸栗・ダキバ(二十九歳)に接近し、インタビュー記事をものにした。彼女はカリフォルニア州立大出身の小柄な日系二世であった。彼女は迂闊にも軽い気持で「東京ローズは私」と署名し、この記事が後、迂闊に彼女を米国反逆罪に陥れる端緒となった。

彼女の父・戸栗遵は山梨出身の移民でロサンゼルスで食料品店を営んでいた。アイバは活発で聡明な娘であり大学では動物学を専攻、大学院で医学に転じた。

しかし母の妹である日本の叔母が病気になったので休学し看病がてら病弱の母に代わり日本を訪問することになり、一九四一年七月五日、二十五才の誕生日の翌日、大阪商船のあらびあ丸に乗り七月二十五日に横浜港に着いた。

日本語が分からず叔母の家から日本語学校に通った。開戦の前後米国への引揚船のチャンスを待ったが果たせなかった。憲兵や特高が度々訪れ日本国籍取得を迫るが彼女はこれを固く拒否した。彼女は同盟通信のモニターのアルバイト(外国の短波放送を聴きタイプ文書を作成)と放送協会海外局の英文タイピストをやった。

同盟で同じ仕事に従事していたフィリップというポルトガル系の二世とお互い理解し合う仲となり、後に結婚した。

昭和十七年、陸海軍、外務省、情報局は海外向け宣伝放送を一元化しようと話し合い、放送会館をそのセンターとした。陸軍が英語の出来るスタッフを探したが南方から、放送経験のある豪・米・比国人の捕虜を集めた。

彼等は誇り高く、対米謀略宣伝放送への負担を拒絶したが、強制的に従事させられた。

この頃、アイバもアナウンサーに採用され捕虜のカズンズ少佐の特訓を受けた。放送内容は「ゼロアワー」と題し、ニュースや、ジャズやクラシック音楽等でディスクジョッキー風にトークが入るものであり、目的は、南太平洋諸島の連合軍将兵の厭戦気分やホームシックを誘うものであった。厭戦トークは「アメリカの軍艦が今頃たくさん海底に眠ってるわよ」とか、低俗な内容のブラックジョークであった。カズンズ少佐等の卓越した経験と技術もあって、この番組は GI 達に人気を呼んだ。海外局に所属していた和田信賢や志村正順も時々三階のこの部屋を訪れた。

南方の放送基地からも現地のアナウンサーを使ってもっと露骨な放送が行われていたらしい。

戦後判明したことだが、捕虜のスタッフは日本人の監視を潜って日本人関係者が分からないようにGI達を励ます言葉を早口で挿入したりしていたのであった。

彼女の放送でのニックネームは「孤児アン」で、ガラガラ声で決して美しい声ではなかったが特訓によって魅惑的な話し方を会得していた。彼女は米国の短波放送で大本営発表が事実と大きく異なる事を知っており米国の戦勝を確信していた。

気の強いしっかり者であったが、栄養失調になった捕虜の僚友達に食料を調達したり、寒さに震える友に貴重な毛布を分け与えたりした。シカゴで日本人会の会長を勤めた篤実な父の優しさを引き継いでいたのであろう。

終戦まで米国籍を守り、愛国心と誇りをもち続けたアイバが、何故魔女狩りのスケープゴートとなり国家反逆罪としてウェストバージニア州のアンダーソン女囚刑務所で十年もの禁固刑に浴しなればならなかったのか、どう考えても過酷な話である「東京ローズ」なる女性アナウンサーは十数人おり、ほか米国籍の男性も数人いた。ニュース係の吉井は戦後、GHQに入りNHKの指導役までやっている。

多くの証人の支援にも拘わらず、アイバは「法律的」に裁かれず、移民法以来反日感情の強かった西海岸のサンフランシスコで「政治的」に裁かれ一九四九年九月有罪となった。おりしもマッカーシーの「赤狩り」旋風で「反逆者」という言葉に米国民は強いアレルギー反応を示していた。一九七七年一月、大統領特赦で釈放されたが、市民権は剥奪され、夫フィリップとの仲も裂かれていた。今(2000年)八十四才の彼女はシカゴの雑貨店で店番をしている。彼女の有罪判決は建国以来二十四の反逆罪の中で最も悲劇的で偽証に充ちた誤審だったと言う米国の記者もいる。彼女は戦争、人種差別、マスコミの犠牲者であった。(則松久夫『昭和の語部・信賢と正順』による。)

註)東京ローズは複数存在した。マッカーサー駐比の折、聴いたローズは別人で、終戦後交通事故死が伝えられている。(須山芳江? 1920年 - 1949年、バンクーバー育ち。「南京の鶯」)

(なお、本文はドウス・昌代著『東京ローズ』1990 文藝春秋刊 等を参考にしている。

#### (備考)

名前 アイバ・戸栗・ダキノ 日本名・旧姓 戸栗 郁子(とぐり いくこ)  
生年月日 1916年7月4日 没年 2006年9月26日  
出身 アメリカ・カリフォルニア州ロサンゼルス



晩年の2006年1月には「困難な時も米国籍を捨てようとしなかった“愛国的市民”」として退役軍人会に表彰された。反逆罪でバージニア州のアンダーソン女囚刑務所で服役中、医学者として病気の囚人の介護に努め、「アンダーソンの聖女」と呼ばれたと伝わっている。模範囚だった彼女は6年余りで出所。

アイバは仮釈放まで6年以上服役し、1977年(同52)に当時のフォード大統領が特赦命令を出すまで「反逆者」の汚名を被ったままだった。